經濟論叢 毎月一日發行
第四十八卷第五號 昭和十四年五月一日發行
大正四年六月二十一日第三種郵便物認可

京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第四十八卷 第五號

昭和十四年五月

論叢

貨幣の非中立性……文學博士 高田保馬

日本の經濟力……經濟學博士 柴田敬

時論

支那法幣の前途と中南支貿易……經濟學博士 木村增太郎

研究

啓蒙時代に於ける支那研究とその現代的意義……經濟學士 島恭彥

農山漁村民の所得と租稅負擔……經濟學士 田杉競

ウェーバーの初期の研究……經濟學士 出口勇藏

ウイクセルに於ける貨幣論の構想とその發展……經濟學士 服部新一

說苑

十四、五世紀に於けるイタリヤの簿記法……經濟學士 岡本愛次

統計的集團に於ける形式的同種性……經濟學士 有田正三

幕末上海貿易の一史料……經濟學博士 本庄榮治郎

附錄

彙報

外國雜誌論題

（禁轉載）

第四十八卷　七八八　第五號　六〇

研究

啓蒙時代に於ける支那研究とその現代的意義（上）

島恭彦

目次

はしがき　一　近世歐洲に於ける支那研究の成立　二　支那禮讃論、ヴォルテール、ケネー
三　支那社會の批判的研究、モンテスキュー、マブリー（以上本號掲載）　四　支那の社會經濟的研究、チュルゴー、スミス　五　啓蒙期の支那研究の史的地位と意義

はしがき

支那研究は歐洲の諸國に於いても相當の歴史と傳統を持つてゐるが、これまでの支那研究に苟も進歩發展の跡の認められる國に於ては、一般の學問の歴史に於けると同樣に、そこには必ず新しい研究方法が舊い方法を批判、克服しつゝ前進すると云ふ過程が見出される。一國の支那研究の確立にはまづ當國の支那に對する働きかけと、其に基く實踐的な知識の蒐集が必要であるが、單にそれだけでは眞の支那研究ではなく、獲得された素材はその國の內部に生れた新しい研究方法と結合して、自らを科學の水準にまで高めてゆくのでなければならない。けだし新しい科學は新しい素材を必要とするばかりでなく、從來人々の生活を無意識の中につゝみ、研究自體をも强く制約してゐるところの舊い觀念形態から完全に解放された、新しい意識をもつた研究者を必要とするからである。これは研究者の個人的努力を俟つて行はれるものではなく、社會全體の歴史的發表につれて行はれる觀念

形態の編成替に關聯してゐる事實である。ところで近世國家の對外的活動や國内の政治、イデオロギーの革新等、あらゆる條件が結合して、こゝに新しい支那研究が成立したのは所謂啓蒙時代のヨーロッパ、特にフランスであつた。そこでは舊い王道樂土的支那觀、訓詁學的支那研究、その他一切の封建道學的支那論が一應清算されて、新しい批判的、科學的支那研究の端緒がうちたてられたのであつた。吾々が啓蒙期の支那研究をとりあげて問題にするのは、科學の進歩と云ふ見地からして、この時代の支那研究が現代の、特に吾國の支那研究に重要な示唆をなげかけるだらうと考へるからである。

一　近世歐洲に於ける支那研究の成立

支那に關する知識は支那に對する實踐を前提としてゐる。古代、中世を通じて歐洲にロマンチックな支那物語をもたらしたものは、歐洲と支那とを結ぶ原始的な陸上交通であつたとすれば、リヤルな支那の知識を歐洲に紹介したのは、進歩した造船技術と航海術を基礎とするヨーロッパ諸國（ポルトガル・オランダ・イタリー等）の極東貿易であると云へよう。併しこの當時支那の紹介に貢獻したのは商人ではなく、むしろ極東貿易を背景として支那に進出した歐洲の宣教師、特に耶蘇會士（ゼスイット）であつた。何故と云ふに近世とは言へ尚デスポティックに構成されてゐるヨーロッパ社會に於て一切の學問を獨占してゐたものはゼスイットであつたし、また「アジア的專制國家」の内部に入り得るものは商人よりも、むしろ專制主義的な思想傾向をもつてゐたゼスイットであつたからである。從つてこの時代に支那と歐洲を結んだのは東洋と西洋に於ける專制國家の上層部内の交渉であつて、未だ市民社會相互の廣汎な經濟的交通ではなかつた。かやうな交渉の上に成立した支那研究は如何なる性格をもつかほゞ推察出來よう。

支那への布教と支那の紹介とに先鞭をつけたのはポルトガル、イタリー等の宣教師であつた。マテオ・リッチ、フランシスコ、ザビエル等はその代表的な人物であらう。併し個々の宣教師の布教と支那研究を組織化するためには、彼等はどうしてもヨーロッパの強力な啓蒙君主と結合しなければならなかつた。かくて國内的紛爭のために他國に後れをとつたフランスが支那研究の水準を著しくたかめたのはルキ十四世の極東政策とゼスイットの傳道事業との密接な提携であつた。極東にまで名聲を及ぼさうとするルキ十四世の努力は先づ第一に科學の力を必要とした。フランスの近代科學が支那の傳統的な天文學や數學を遙に凌駕するものである事を示す事はとりもなほさずフランスの優越性を世界の果にまで知らしめる所以であつた。然るに當時さう云ふ近代科學を獨占してゐたのは尙舊教の僧侶、殊にゼスイットであつたから、この專制君主は彼等に注目したのである。ルキは彼等を王室アカデミーの會員に任命し、王室費の中から補助し、彼等の中の優秀なものを支那へ派遣したのであつた。[1] 恰も當時支那は「東方のルキ十四世」と呼ばれる英主、康熙帝（一六六一―一七二二）によつて統治されてゐた。宣教師達はこの君主の西歐科學に對する愛着を利用して、自己の地位をかため、布教事業を伸張しようとしたのであるが、活動範圍の廣まるにつれて、彼等の支那に關する知識も深まり、次第に歐洲へも支那の知識が傳播して行つたのは當然である。例へば康熙帝の援助の下にゼスイット達が科學的測量技術を利用して作成した（一六八二―一七一八）支那の地圖は今まで神秘な霧にかくされてゐた支那の全貌を歐洲人の眼前に展開したのであつた。

併しゼスイットの支那研究はいかにも廣範圍に亙り、其以後の支那研究者が是非とも利用しなければならぬ材料を提供してゐたとは云へ、其は彼等の宗教家としての實踐やデスポティックな立場等から當然生ずる限界を持

1) Richthoven, China. Bd. 1 S. 678.

たねばならなかつた。先づ彼等は宗教家であり、彼等の使命は布教である。さう云ふ目的や實踐によつて彼等の支那研究は必然的に制約をうけねばならないのである。あらゆる宣教師の中で特にゼスイットは世俗的なものに對して充分適應性を持つてゐたから、支那の風俗、宗教、政治を理解し、これと妥協しつゝ支那人の間にキリスト教を植ゑつける事が出來たのであるが、かうする事によつて、支那の歴史、社會に對する認識を深めはしたものゝ、他面ではキリスト教的な意識をもつてそれ等を歪曲した點がないでもない。殊にフランスのゼスイットと反對の立場にあるフランシスコ派やドミニコ派の側から支那人の偶像禮拜性、支那哲學の無神論的性質を指摘され、これと妥協しつゝあるゼスイットに對して非難が起される場合、ゼスイットは反對にいよ〳〵支那文明の優越性を辯護しその起源をキリスト教に接近させようとする態度を取らざるを得ない。[2] 例へば一方は支那の古典に現れる「天」や「上帝」の如き觀念が單なる「蒼天」を意味し、支那人の儀式に何等の宗教的意義を認めないとすれば、他方は支那人の信仰する天はキリスト教の神の意義に近く、支那人は極めて敬虔なる民族である事を證明しようとしたのであつた。この支那の宣教師達の間で生じた、支那の風俗、宗教に關する解釋の對立はその當時儀禮問題 (Question des Rites) と呼ばれ、其はとりもなほさずヨーロッパに於ける宗教上の紛爭を支那研究にまで延長したものに他ならない。この對立を通じて支那の歴史、社會に對する認識は深まつて行つたであらう。併しこの對立は結局宗教上の立場や宗教觀の對立に還元されるもので、それから派生した學問的成果はあくまで副產物に過ぎないのである。殊に支那人の偶像禮拜性が確認された結果、宗教家の支那研究が嚴禁されたとすれば、宣教師の研究は始めから一定の限界を持つてゐたのである。

2) 後藤末雄著、支那文化と支那學の起源、二〇一頁。

ゼスイットの支那研究のもう一つの缺陷はその政治的立場より生じて來るものである。彼等はその學識、政治的手腕を以つてヨーロッパの專制政治に奉仕してゐたのである。彼等を支那へ派遣したのは歐洲の專制君主であつた。彼等を迎へたのも支那の專制君主であつた。彼等が支那皇帝（康熙帝）の知遇に感激して支那の政治を謳歌したのも當然である。また支配者のイデオロギー、殊に支那の古典を無批判的にとり入れ、治者的觀念と現實とをすりかへて王道樂土的、德治主義的支那觀に陷つたのも當然である。科學的支那研究は支那の歷史、社會を僞裝してゐる古典の批判を以て始まると言ふ。併しゼスイットのデスポティックな性格と彼等をとりまく治者の社會層はこの批判を困難ならしめてゐたのであつた。

支那研究に新な展開の始まつたのは支那に關する知識がゼスイットからフランスの啓蒙哲學者の手に移つた時であつた。實にこの時こそいまゝで狹隘な政治的、社會的立場の故に全面的に支那研究に適用される事を妨げられてゐたゼスイット達の學識が廣く市民階級の側に移つたのである。例へばデュ・アルド師（du Hald）の編纂した「支那帝國全誌」（Description géographique, historique, chronologique et physique de l'Empire de la Chine et de la Tartarie chinoise. Paris. 1935. 4. tomes）の如きは當時の哲學者、經濟學者、其他社會科學者達の間で廣く讀まれたものであつた。それではヨーロッパの支那に對する新しい關心を刺戟したものは如何なる原因であつたか。周知の樣に十八世紀のフランスでは封建制度と專制政治に對する批判が開始されてゐた。人々がヨーロッパの社會と全く異る支那社會に注目しはじめたのは歐洲市民社會の自己批判が始まつた時であつた。ヨーロッパではまだ人類が森林の中を彷徨してゐる時代に既に完備した國家制度と政治を持つてゐた支那、聖書以前の起源を持つ古い支那、それ

は確かにヨーロッパ人の驚嘆に値するものであつた。ヨーロッパ人はこの支那に關する知識をとり入れ、自己の國家觀、歴史觀を豐富にしつゝ、前よりも一層廣い見地に立つて自國の政治や社會の批判に乘出したのである。特に專制政治に對する批判が尖鋭化し、革命の空氣の漲つてゐたフランスに支那研究の起こつた理由を、ヘーゲルは「東洋世界論」の中で次の樣に明かにしてゐる。「ルキ十四世治下の十七世紀に於いて人々は國内住民の不安な精神を察して、この點では支那の住民はどうふるまつてゐるか、世の中の靜謐がどう云ふ風に保たれてゐるか住民は幸福で滿足が充分みなぎつてゐるかどうか、熱心に知らうとしたのであつた。[3]」

支那の專制政治が啓蒙君主の典型と見做されようと、自國の腐敗せる專制政治の一亜種と考へられようと、卽ち支那の專制政治に自己の味方を見出さうと敵を見出さうと、これらの意見の對立は革命前のフランスの社會的、政治的對立を反映せるものであつた。そしてさう云ふ對立を通じて、アジア的專制主義の特殊性のみならず專制政治一般に對する認識も深化されて行つたのである。かやうな啓蒙哲學者、特にアンシクロペヂストの支那研究はやはりゼスイットの蒐集した資料に基いて始めて遂行されたものであつた。併しこの場合には、舊い宗教的立場から全く自由な新しい世俗的な見地から支那の研究が行はれてゐる事實を無視してはならない。アンシクロペヂストの中にもゼスイットと同樣な支那專制政治の禮讚論をくりかへすものがあるとしても、其は全く新な見地に基くものであつて、更に一そう批判的、科學的な支那論を展開する方向への橋わたりとも考へられるのである。

3) Hegel, Die Orientalische Welt. Philosophie der Weltgeschichte. herausg. Lasson. S. 277.

二　支那禮讃論

――ヴオルテール、ケネー――

中世より近世への過渡期にある歐洲では舊制度の崩壞過程に伴ふ深刻な宗教的紛爭が到るところに勃發してゐた。この紛爭が支那研究にも所謂「儀禮問題」に對する意見の對立として反映してゐた事は既に一言したところである。舊社會の醜惡さ、殊に宗教的ドグマを固持して新思想を迫害せんとする封建的勢力に對して嫌惡を感じてゐたヴオルテールには支那は完全な信教自由が實現してゐる理想鄉の如く思はれたのである。けだし「儀禮問題」を中心として宣教師の間に論爭がくりかへされる中に、支那社會の內に幾通りもの宗教が默認されてゐる事、支那人の奉ずる儒教は單純な道德觀であり何等の狂信や迷信も含まない事等々が、次第にヴオルテールにも明かになつたのである。彼はそれ故に「哲學辭典」中の「支那論」で次の樣に書いた。「もう一度云ふが、儒教は實に素晴しい。儒教には迷信もないし、馬鹿げた傳說もなく、理性や自然を愚弄し、明確さをかくすために佛僧が色々な解釋をほどこすやうなドグマもない。四千年この方、支那人には最も單純な宗教が最もよい宗教と思はれたのである。……支那人は地上の聖賢と共に神を崇拜する事だけで滿足してゐる。それなのに歐洲ではトーマス、ボナベンチユラ、カルヴアン、ルーテル、ジヤンセンニス、モリナの諸派が分裂してゐる。[4]」ヴオルテールの以上の言葉は單純な支那論ではなしに、支那社會を模範とする歐洲社會の自己批判の言葉であるとも言へよう。彼は支那を禮讃した爲に、支那人と同樣な無神論者と看做されて大學を追はれた一啓蒙哲學者の例をあげてゐる。これは實に歐洲の舊勢力の視野の狹隘さを暴露するばかりではなく、また其は支那文化自身に對する大なる誤解と

4) Voltaire, Dictionaire philosophique. (De la Chine.) p. 273.

云はねばならない。「吾々は支那人をキリスト教に改宗させようとしてゐる。とても感心な熱心さである。だが支那の古さを疑つたり、彼等を偶像教徒などと言つてはならぬ。」[5] 支那人は聖書以前、基督教以前の歴史を持つところの成熟せる文化人である。それを後輩のクリスト教徒が批判し改宗させようとするのは僭越ではないか。

ヴオルテールの禮讃は更に支那の政體にまで及ぶ。「支那帝國の組織は實に嘗つて世界に存在したものゝ中で最上のものである。支那はすべての事が家長的權力に基礎づけられてゐる唯一の國である。地方の官吏が職を去るに當り地方民の惜別をうけない時には罰せられる唯一の國である。また他國に於ては法律は罪惡を處罰するに止まるのに、支那の法律は善行に對する恩賞を定める唯一の國である。吾々は征服したブルガンディーやフランクやゴート等の習俗に服してゐるのに、支那は征服者に法を採用させた唯一の國である。」[6] ヴオルテールがかう言ふ時、支那の歴史の古さや德治主義について、支那の古典の教へるところをそのまゝ信用してゐることは明かである。また彼はゼスイットの話をも無批判的にとり入れて、支那の重農主義を次の様に賞讃し、歐洲の政策を批判してゐる。「如何なる運命によつて、農業は支那に於ける程心から尊敬されないのだらうか。歐洲の國々の大臣は皆たとへそれがゼスイットの手になるものでも、次の様な記錄を讀むべきである。」かう言つてヴオルテールは支那皇帝の農業尊重、收穫期の國家的祭典等の例をあげて最後にかう結んでゐる。「吾が歐洲の主權者達はかう云ふ例を知つて何をなすべきであるか。賞讃せよ、赤面せよ、だが何よりも模倣せよ。」[7]

ヴオルテールの支那論そのものはゼスイットの水準を少しも出てゐない。彼はたゞゼスイットから材料をそのまゝ借用して來て、これをヨーロッパの政治批判に逆用してゐるに過ぎないからだ。併し他面から見ればヴオル

5) Voltaire, op. cit. p. 272.
6) Voltaire, op. cit. p. 272.
7) Voltaire, Dictionaire philosophique. (Agriculture) p. 34.

テールの支那論はゼスイツトと違つて純然たる世俗的欲求に基いて展開されてゐる。而てさうする中に自ら歐洲の文化と支那文化との比較研究が行はれ、啓蒙哲學の視野の尙一層の擴大に貢獻してゐるのである。かくしてヴオルテールの支那論は新な政治的意義を持つてゐるし、また歷史觀、社會觀の展開にも役立つてゐると考へられよう。

ヴオルテールに關聯して述べなければならないのはケネーの支那論である。彼は重農主義者の機關誌 "Ephémérides du citoyen" に「支那專制政治論」(Despotismes de la Chine) を書いた。これは支那の歷史、社會、政治、經濟等各方面に亙る相當まとまつた研究ではあるが、本質はヴオルテールと同じ支那禮讚論である。さて啓蒙的絕對政治——それは封建制止揚の役割を果たす——を理想とするケネーにとつて眞に理想的と思はれたのは次の樣な支那の事情であつた。卽ち支那には王族、官吏、儒者等の治者と農民、商人、工人等の被治者の階級別は存するが、世襲的貴族の階級は存在しない。最高位の大臣の子弟も才能がなければ、平民の列に入つて卑しい職にたづさはらなければならぬ。且つ支那帝國では主權者も官吏もすべて自然法を守つてゐる。この場合自然法とは主として道德を意味してゐる。換言すれば、支那固有の所謂德治主義を指してゐるのである。ケネーは言ふ。「支那人は道德と政治とを區別しない。彼等に從へばよく生きる術は則ちよく治める術であつて、この二つの學問は一つのものである。」[8] ケネーは支那の古典に現れる天子の德行を信じてゐる。五經によれば、支那の天子は「天」(Tien) や「上帝」(Chang-ti) を熱心に信仰してゐる。天子は一方で天の子として天をうやまひ、禮拜しなければならぬが、他方で人民の父として民の上に善政を施さねばならぬ。若し天子が天命に違ふやうなことがあれば、自

8) Quesnay, Despotisme de la Chine. Oeuvre de Quesnay. p. 592.

ら王座を降りて、不明を天に詫びなければならぬ。支那の天子の敬虔ぶりは、洪水や旱魃に際して、自分の不德を天にわび、日夜惱める民のために盡瘁するところにも現れる。この場合ケネーは支那天子の手厚きもてなしをうけた宣教師ル・コント（Le Comte）等の物語をそのまゝ受け入れてゐるのである。「吾が宣教師の言によると、君主の斯樣な敬虔ぶりは天に達した。空は黑雲に被はれ、降りくる雨は一時に全帝國の豐かなみのりをもたらした。この出來事は自然のものであつたか、奇蹟であつたか論ずるに及ばない。たゞ吾々は支那の天子の信仰と民に對する愛がどんなものであるか明かにすれば足りるのである。[9]」

所謂德治主義を裏から見れば、支那特有の絕對主義が姿を現はす。この事實はケネー自らあげてゐる支那官吏の人民に與へる訓示の綱目を少し分析して見ればほゞ想像出來た筈である。卽ち「父を敬し年長者を尊ぶ事、家庭に平和と統一をもたらすために祖先を崇拜する事、紛爭を避けるため村落內に團結を維持する事、人民が義務を怠らぬ樣に刑罰を明示する事、社會の安寧とよき風俗を保つために、すべての人を禮儀と德行の中に訓育する事、犯罪者に隱家を與へぬ事、定められた貢納を正確に拂ふ事、盜難や盜賊の逃亡を防ぐため、町內の長老と協力する事。」吾々はこれらの各綱目から鞏固な共同體と習俗を以て人民を强く壓迫してゐる支那の父家長的專制主義を心に思ひうかべる事が出來るであらう。併し支那禮讚者のケネーにはもとより此の德治主義の秘密を明かにする事は出來なかつたのである。殊に支那の傳統的政策が農業を重んじ商業を輕視するところにありとすれば、ケネーの重農主義的學說より見て支那は正に理想的な國家であるに相違ない。何れにせよ幾千年の昔からゆるぎなく存續してゐる支那帝國はケネーにとつて所謂「自然法」に基いた比類なき國と思はれた。彼は自己の主張す

9) Quesnay, op. cit. p. 588.

る「自然法」が支那帝國に現實に行はれてゐると想像して隨喜の涙を流したのである。

併しケネーの謂ふ自然法は言ふまでもなく近代經濟學によつて發見された資本主義社會の經濟的法則を意味するが、支那社會の內に見出されるのは單なる道德法に過ぎない。ケネーの自然法は近世歐洲の資本主義的生產とともに興隆する自然科學を背景とせる經濟學上の法則であるが、支那の自然法は停滯的な農業社會に於ける幼稚な自然認識とこれと混淆せる道德法に他ならない。而もケネーの經濟學は舊制度を打破して生產力を伸張しようとするが、支那の道德はむしろ貧しい大衆の上に專制主義的機構を維持しようとする。觀念によつて美化された支那と現實の支那、ケネーの所謂「合法的專制政治」(Despotisme légale) と現實のアジア的專制主義の間には大なる距離が存在する。併しケネーの支那研究が宣教師の見聞記に基く限り、彼の描く理想の支那と矛盾する樣な事實がしば〳〵語られるのは止むを得ない事である。ケネーはある個所で次の樣な事實を記述してゐる。「支那人は一日中腕の力で土地を耕作する。しば〳〵終日膝まで水につかつて而も夜に彼の家で米と野菜と少しばかりの茶があれば、それで充分幸福なのである。」「職人は絕えず仕事を求めて街を歩く。鍛冶屋まで金床と鎚とを持つて每日の仕事に行く。宣教師の言葉を信ずるならば、床屋までが肩に腰掛を擔ひ、手に金盥と藥罐を持つて街を歩いてゐる。すべての人々が熱心に不幸もなく病氣もせずに生活の糧を求める。」「勤勞に必要な限りのあらゆる工夫、必要に迫まられて利用する一切の利益、關心をそゝるすべての資源はこゝでは使用され有利に用ひられてゐる。貧民の大群は人が道路になげだすあらゆる種類のぼろや屑などをせつせと拾ひあつめて生活しなければならぬ。土地を肥やすには最も汚い汚物でさへも運ぶのである。支那のどの地方でもかゝる用途のために手桶をかつ

いだ人々が見うけられる。」[10]これらの記述はいづれも支那民衆の生活程度が極度に低い事と窮迫せる事を物語つてゐる。だが重農主義をとる支那政府の下に貧しい農民が生活し、民の幸福を祈る天子の治下に如何なる仕事でも求めて生き行かうとする逼迫せる大衆が存在すると云ふ事實はどう説明すべきであらうか。ケネーの近代經濟學はこの民衆生活の低さと云ふ事實をとらへて、そこから支那專制政治を批判し、德治主義の秘密を暴露すべきであつた。然るにケネーの經濟學の保守的な一面は專制政治を僞裝してゐる儒教的イデオロギーと妥協して了つたのである。

(註) ケネーがヴオルテールと同樣に儒教的イデオロギーと支那社會の實相をはきちがへたと云ふことは次の例によつても明かである。ケネーは支那商人の不德と欺瞞性を指適する論者に向つてかう辯護を試みてゐる。「だがそれは支那人の樣な開化した國民にはとても考へられない事だ。そこでは常に商業道に眞義と誠實が奬勵されてゐるのである。これは孔子の道德の最も重要な一つであり、この帝國の法律たる道德律なのだ。」(ケネー、著作集、六〇四頁)

三　支那社會の批判的研究

——モンテスキユー、マブリー——

支那社會の科學的研究を行ふには、王道樂土的支那觀の基礎になつてゐる支那古典の再檢討を要するばかりでなく、さう云ふ觀念に親和を感ずる一切のヨーロッパ的舊文化、舊思想から解放されねばならないのである。其故に歐洲の支那研究は專制主義と封建制度の批判者によつて始めて一種の科學性を與へられた事は決して偶然ではないのである。勿論彼等の研究は尙宣教師のもたらした報告や資料に基いてゐる。併しヴオルテールやケネーの樣に其等を無批判的に取入れずに、歐洲の新思想を媒介として新しい支那論を展開してゐるのである。斯樣な

10) Quesnay, Oeuvres. p. 580–581.

意味に於て、其は支那社會の批判的、科學的研究と呼ばれるべきものであり、宣教師的支那研究の水準を越えるものと言へるだらう。

吾々はこの點で先づ「法の精神」の著者モンテスキューを推さねばならない。彼は同書の支那帝國について論ずる一章に於て次の樣に宣教師の支那論に不信の意を表してゐる。「恐らく耶蘇會士は秩序整然たる外觀に欺かれたのではあるまいか。そして彼等自身も君主專制政治の下に支配されてゐたし、アジア諸王の宮廷から專制政治を發見する事を好んだから、專制政治の絕えざる運用に感嘆したのではなからうか。」[11]これは從來支那研究を獨占してゐたゼスイットの專制主義的立場を鋭く指摘した言葉である。ヨーロッパ的專制主義の側につくものは、またアジア的專制主義をも支持する。然るにモンテスキューはこの專制主義をこそ批判しようとしてゐるのである。彼はケネーの樣に專制政治を「合法的」と「恣意的」との範疇に分類せずに、一樣に「恐怖」を原理とする政治であるとした。「共和制に於いては德性を必要とし、君主制に於いて名譽を必要とする樣に、專制政體に於いては恐怖を必要とする。」「制限政體はその欲するがまゝに何等の危險なしに、その發條をゆるめる事が出來る。それはその法とその勢力自體によつて維持されてゐるのだ。併し專制政體に於て君主が一瞬時でもその腕を上げる事を止めるや否や、彼が最高位にある者共を卽座に絕滅する事の出來ぬ場合はすべては失はれる。」[12]專制政治一般に於けると同樣に、支那專制政治に於ても、皇帝はたえず重い刑罰と鞭によつて人民を威嚇しつゝ、彼等の野心をことゞく絕滅しなくてはならぬ。

併しモンテスキューも專制政體一般の理論を單純にアジア的專制政治に適用出來ない事を知つてゐた。而して

11) Montesquieu, Esprits des Lois, Tome. 1, Liv. 8, Chap. 21.
12) Montesquieu, op. cit. Liv. 3, Chap. 9.

支那の專制政治に特色を與へるものは所謂德治主義と家長政治の原理であつた。一般に專制政治は法律によるよりも、固定した習俗と生活樣式によつて國內の平穩を保つてゐるのだが、これを極端に實行してゐるのは支那である。そこでは實にこまゞ〳〵した典禮の墨守によつて民衆の生活樣式を變化しない樣にしばりつけてゐる。「生活樣式の不變なのは支那に於てだ。そこでは女子は全く男子から分離されてゐる上に、學校では習俗と同じく生活樣式を教へる。御辭儀の仕方が巧妙だと云ふ點で、人はその學者なる事を認める。これらのことは一旦莊重な博士達によつて掟と定められるや、道德の原理の樣に固定してもはや變化しない。」[13] 支那の道德、典禮の中で最も重要なのは家長や祖先に對するものである。支那の立法者達は家長や祖先を崇拜する事の中に、人民を支配する最も有效な手段を發見したのである。從つてモンテスキューが「アジアに於てはいつも家內隷屬制と專制政體とが歩みを共にして進んだ。」[14] と言ふ時、それは支那に最もよくあてはまる言葉だと言はねばならない。實に家長的專制は支那政治の特色である。家長が家族員に對して日常の細々した事を配慮する樣に、支那專制君主は人民を治めてゐる。卽ちこゝでは家政と法律と習俗と生活樣式と宗教とが混沌として未分の狀態にあるのだ。從つて日常生活の全く下らぬ事、卽ち嫁が毎朝起きて姑にかく〳〵の挨拶をすると云ふ樣な下らぬ外面的なことが支那の憲法に對して重要な意義を持つてゐるのである。[15]

更に支那の專制政治に特色を與へ、それをある程度まで緩和してゐるのは支那の特有な風土であるとモンテスキューは考へてゐた。卽ち支那の氣候は人口の繁殖を刺戟する。それ故に支那の婦人は世界に比類のない程、多產である。從つて人口は生活資料の量よりも急激に增加し、人民は飢餓に陷る。飢餓に陷れば人民は食を求めて

13) Montesquieu, op. cit. Liv. 19, Chap. 13.
14) Montesquieu, op. cit. Liv. 16, Chap. 9.
15) Montesquieu, op. cit. Liv. 19, Chap. 19.

四散し、こゝかしこに盗賊團が結成される。それらの中何れかゞ優勢になつて、首都に進擊し、專制政治を打倒する。かくて「最も苛酷な暴政も繁殖の進行を少しも阻止せぬ。……支那は暴政にも拘らず、その氣候の力によつて常に人口が繁殖して、暴政に打勝つだらう。」[16]かやうに所謂地理的唯物論によつて、モンテスキューは支那專制政治が修正される原因のみではなく、それが成立する原因をも說明しようとした。卽ち曰く、「アジアでは常に大帝國が現れた。歐洲ではそれが存立し得なかつた。その理由は、吾等の知るアジアはより大なる平原を持つからだ。」蓋し廣大な土地に於ては君主一人の權力が遠くに駐在する總督や執政官を畏怖せしめるだけ强くならなければならないし、また權力の分裂は障壁の少い大平野の自然的性質と兩立し得ないからである。「從つてアジアでは權力は常に專制的でなければならぬ。なぜならばもし隸屬制が極度でないと、やがてその土地の性質と兩立し得ぬ分割が爲されることにならうから。」[17]モンテスキューがアジアを「專制主義がいはゞ風土化された地域」と呼んだのは以上の理由からであらう。吾々は勿論かう云ふ單純な風土的原因を以てアジア的專制主義の成立を說明しようとする限り、モンテスキューの說を誤謬であると斷じなければならぬ。支那專制主義の成立に地理的原因が全く働いてゐないと言ふのではない。例へば農業のために行はれた巨大な治水事業が支那專制政治の成立を明かにする要因として今日あげられてゐるが、これは支那の氣候、風土、地質、河川の自然的狀況にその原因を持つてゐる事は明かである。けれどもその事は何もモンテスキューの地理的唯物論の正當性を證明するものではなく、むしろ自然は人間の生產的勞働（農業）及び生產關係——これをモンテスキューは無視してゐる——を通じ、專制的上部機構の形成に働きかけるものであることを說明してゐるのである。但しモンテスキューの素朴な地理

16) Montesquieu, op. cit. Liv. 8, Chap. 21.
17) Montesquieu, op. cit. Liv. 17, Chap. 6.

的唯物論の誤謬にも拘らず、吾々はその積極的な半面を忘れないでおかう。卽ちモンテスキユーに於いては、支那の專制政治は決してモラライズされないで、客觀的な存在からしてその成立根據が說明されてゐるのである。而てこれは專制政治に大膽に、批判的に相對し得る研究者にして始めて可能であつたのである。

(註) 私はモンテスキーの支那研究の學問的價値を低く評價せられる後藤末雄氏の說に贊成する事は出來ない。その內容自體から見ても、後世の支那研究(マブリイ、スミス、ヘーゲル)に及ぼした影響からしても高く評價されてよいと思ふ。

支那の批判的研究に於いて、モンテスキユーの影響をうけてゐるものに、マブリー(Abbé Gabriel Bonnot de Mably, 1709-1785)がある。彼は「政治社會の自然的、本質的秩序に關し經濟哲學者に對する疑問」と題して、メルシエ・ド・ラ・リビエールに當てる公開文を書いてゐるが、特にその中の數節はケネーの「支那專制政治論」の批判の形で自己の支那論を展開してゐるのである。彼もモンテスキユーと同樣にケネーの支那論の根據となつてゐる宣敎師の話に對して疑をいだいてゐた。彼は支那の禮讚者自身の專制主義的な立場を知つてゐるからである。「二、三の著述家が支那人や支那の土地の肥沃さに讚辭を與へてゐるのは他ならぬ專制主義に媚を示してゐることなのだ。」[18] 讚美者は支那人や支那の政體の外面的な禮儀や秩序に心を奪はれて、その內部にかくされてゐる眞實の卑屈さとそれに伴ふ下劣な惡德を見落して了つたのである。論者は支那の德治主義と支那人の德性を證明するために支那の古典、特に五經(U-King)を引合ひに出すが、支那人が絕えずその聖典を手にし、ユダヤ人が舊約聖書に、トルコ人がコーランに拂ふ樣な尊敬を拂つてゐるとしても、その事は決して支那人の德性の證明になるものでもなく、彼等が現實に古典の敎へを守つてゐる事にもならない。斯樣にマブリーは古典の敎へと現實

18) L'abbé de Mably, Collection complete des Oeuvres. Tome 11. p. 70.

との乖離を明かにし、儒教的觀念で現實を解釋しようとする意圖をうちくだくのである。

マブリーは更にケネーの述べてゐる樣な支那の政體の古さと不變性について疑問を持つてゐる。「支那の政府が四千年以來不變であり、何等の變革をうけなかつたと考へる限り、支那歷史はわからないことだらけである。」[19] マブリーは支那の歷史の特殊性をむやみに神祕化する事なしに、大膽に歐洲の歷史の常識を適用しようとする。「私は支那の歷史と他國のそれとの間にある類似性が存在するものと信ずる。」記錄によれば支那には封建諸侯の內亂も政體の變革もあつた。この事實は支那人もやはり普通の人間的感情と自由へのあこがれを持つてゐることを暗示してゐるのである。もし支那の專制政治が永く存續してゐるとしたら、それはケネーの所謂自然法にかなつてゐるからではなしに、むしろ人民が極度に卑屈になり隸屬的となつて、この專制政治の桎梏を取除く氣力を失つてゐるからである。「次の樣に言ふ事を許してもらひたい。君が道理と無類の聰明さの合作になるもの（支那政體）と考へたのは、恐らく人心の萎靡と自由になることを絕望した民衆の疲弊の結果に他ならなかつたであらう。」[20]

マブリーも亦支那專制主義の特殊性、卽ちそれが直接暴力に訴へないと云ふ點を認める。併しそれはケネーの言ふ樣に支那の專制政治が「合法的」(legale) であるからではなく、また、他の封建的道學者の言ふ樣に「王道政治」が行はれてゐるからではない。其はマブリーによれば支那專制政治が云はゞ老衰してゐるからなのである。「もしかう云ふ樣な表現が許されるならば、こゝでは恐らく專制主義が老衰したのであらう。そして老衰するに從つて苛酷さと峻烈さが少くなつて來たのであらう。」[21] 併し支那社會はまた別の目に見えぬ專制主義によつて支配されてゐる。それは支那社會に特有な繁文縟禮、舊慣墨守主義である。支那人はこの舊制度の壓迫のために、新

19) Mably, Oeuvres, p. 105.
20) Mably, Oeuvres, p. 101.
21) Mably, Oeuvres, p. 108.

しきものに對する感覺や進歩への意欲を完全に失つてゐる。この思想能力を喪失した支那人民の上に專制政治は維持されて來たのである。「專制主義は此のうるさい束縛を支那人に課して來たのだ。そして政府の安泰を保つて來たのだ。[22]」この支那的專制主義の壓迫によつて、支那人は皆精神的不具者になつてゐる。支那人は二千年前から現在と同樣な知識をもつてゐて、これを少しも發展させなかつた。殊に國家の官吏は複雜な漢字を習ふために徒らに時を過し、彼等の通過しなければならない國家試驗も二、三の簡單な道德問題に限られてゐる。それ故に彼等の思想には發展性がない。彼等は何時までたつても現在ゐる場所にとゞまつてゐるだけでゐる。さうする事がよいからではなくて、現在とゞまる場所がずつと昔から存在してゐると云ふ理由によるのである。官吏と同じく支那の專制君主自身も人民全體の遲鈍と愚劣さに影響されて、何等の希望も努力もなしに生きてゐる。從つて支那の專制政治が比較的穩和だと云ふ事實は、それがケネーの言ふ樣に「合法的」であるからではなしに、被支配者全體、從つて又支配者自身も社會の正しき目的に對して全く無感覺になり、何等の憂ひもよろこびもなく、植物の樣に醉生無死してゐるからである。人民の側から批判的精神のわき起つて來ない處に、專制君主は暴力を振ふ必要はないのである。併し「支那人に新しい知識を與へ、彼等の地位を正しく判斷させて見よ。君は忽ち專制主義が猜疑深くなり、つゞいてびく〳〵し出し、最後には狂暴になるのを見るであらう。[23]」こゝに於て始めて支那の專制政治はその本性を現すのだ。

老衰專制主義のいま一つの現れは、支那人が一般に勇氣と名譽心に缺け、鬪爭的精神に乏しく、この支那人から構成される國家の戰鬪力も著しく薄弱な事である。それ故に支那の國家は外國からの侵入者や國內の叛徒によ

22) Mably, Oeuvres, p. 109.
23) Mably, Oeuvres, p. 110.

つて容易に打倒された。而も征服された支那人はその狀態に滿足して、征服者の壓制を打破しようとしない。かやうな無氣力な國民を育てたのは支配者層に屬する官吏や儒者や文人等である。彼等は專制主義に好都合な精神的奴隷を養ふ事は知つてゐるが、勇敢な兵士を作る事は出來ない。「國家のために命をなげ出す人々の精神をたかめることは必要である。併し專制主義は自分の側に臆病な奴隷がゐなくなると、不安になるのである。」[24] 斯樣にマブリーは支那專制政治の矛盾を鋭く指摘してゐる。

マブリーは最後に支那の經濟狀態に關するケネーの理論に批判を加へてゐる。ケネーは支那の人口が多いと云ふ事實からして、支那の善政を結論してゐるのであるが、この論法は決して正當ではない。ケネー式の「善政」が行はれてゐない所で、いくらも人口の多い國があるからだ。むしろ支那の政府は肥沃な土地と尨大な人口とを擁しながら、積極的にこれらのものを利用して生產力を增進し、大衆の貧困を除かうとする氣力を持合せないと云ふのが事の眞相である。さうでなければ、支那の內部に何故かくも多くの貧民と浮浪人があふれてゐるだらうか。支那の經濟政策がケネーの言ふ樣な理想的なものでないと云ふ言は、支那人は決してケネーの近代經濟學の原理を認識してゐないと云ふ事實を見ても明かである。マブリーは支那ではケネーの非難した樣な間接稅、人頭稅、關稅が課せられ、稅制が亂れてゐる事實をあげ、次の樣に詰問する。「もし四千年間の合法的專制政治の後にも尙依然として支那がかやうな無知の狀態に沈滯してゐるとすれば、かくも眞理を發見する事のおそき、而も自己の誤りを匡正する事のおそき政府を君はどうお考へになるか。」[25] これはケネーの支那讃美論に對する痛烈な批判であると思はれる。

24) Mably, Oeuvres, p. 116.
25) Mably, Oeuvres, p. 121.